

国立台湾大学での講演要旨 ■ 一九九四年一月一五日(土)

禅の立場から見た日本仏教の現状と課題

横浜善光寺留学僧育英会理事 東 隆 眞

〈前 説〉

手術退院後一か月足らずの病身を機上に乗せて、台湾に赴いた。

一九九四年・平成六年一月一五日午後二時より午後四時まで、国立台湾大学の哲学系館会議室で、「禅の立場から見た日本仏教の現状と課題」と題して、学生たちにも講演した。要旨は、後述のとおり。

通訳は、台湾大学の葉阿月博士(哲学系教授)と許介鱗博士(教授。日本総合研究中心主任)。

講演ののち、私は、横浜善光寺留学僧育英会理事長黒田武志老師とともに、台湾大学陳維昭総長と会談し、台湾と日本の学術交流の促進とその重要性において、

意見の一致に達した。私のメッセージは次のようである。陳総長は大いにうなづき、固い握手を交わした。

「このたび、国立台湾大学で講演する機会を与えていただいたことに心から感謝いたします。

また、ご多忙のなか、時間を割いて会って下さいましたことは、私にとって無上の光栄であり、よろこびとするところであります。

私は「イラ・フォルモサ」うるわしの島台湾への訪問は、二度めでございますが、今後も訪問したいとおもいます。

台湾と日本は、経済、科学、芸術などの交流を通し

て、これからますますおたがいに共存共栄していかなければなりません。

とくに、私たちは、宗教、学術、教育、芸術など文化の各方面で、国際交流をすすめて、台湾との相互理解を確認し、アジアの繁栄、世界平和の達成に努力し、

〈講演の要旨〉

一

ご紹介をいただきました東です。

このたび、国立台湾大学で、このような機会を与えてくださいました皆さまに、心から感謝いたします。

私は、「禅の立場から見た日本仏教の現状と課題」と題して、二、三のことからを申しのべ、みなさまのご批判とご指導をいただきたいのでございます。

仏教が歴史的、社会的に成立するについては、

地球上に真に豊かで美しい生活を実現しなければならぬと存じます。

いちばん大切なことは、こころの国際交流ではないでしょうか。

どうか、よろしくおねがいたします。

仏宝（諸仏・諸菩薩）、法宝（経、律、論）、僧宝（出家僧侶、在家信者）の三宝を絶対的要件とすることは、すでに、ご高承のことと存じます。

換言すれば、三宝は、教祖（仏宝）、教義（法宝）、教団（僧宝）であります。この三宝をモチーフとして、演題に対処したいとおもいます。

二

第一に、仏宝・教祖について。

仏教の開祖は釈尊であります。日本の仏教



は、釈尊をより正しく理解し、それぞれの教団において、はつきりと位置づけるべきであると私は考えるのであります。

私ども禅門に学んだ者に伝えられたところに
よりますと、私は、道元禅師、瑩山禅師を両祖とする日本の曹洞宗に属するのですが、おおよそいまから二千五百年あまりむかし、釈尊は、三十五歳、十二月八日早朝、インド、ネイランジヤナー川のほとり、菩提樹のもと、金剛座上に坐禅をして、東の空に輝やく明星を見てお悟りを開いたとされています。

このとき、釈尊は、「我と大地有情(ありとあらゆるもの)と同時に成道(仏道を成就すること)す」という意味のことを叫んだといわれています。それは、おおよそ、あらゆるすべての存在は、おなじ一つの生命の営みであることを自覚することにほかなりません。

これが、仏教の歴史的発祥、宗教的原点であ

ります。釈尊の坐禅成道がもとになって、その後のさまざまな仏教の展開が行われたのです。その意味で、仏教は禅にはじまり、禅は仏教となっていたと、私どもはうけとめているのであります。のちに、禅は仏教の一つの流れとして位置づけられるのですが、そのなかにおいて、禅は仏教の特色を最もはつきりとしたかたちで継承し、堅持してきているのではないかとおもわれます。

日本仏教は、インド、中央アジア、中国大陸ないし朝鮮半島から伝承した、いわゆる北方仏教、大乘仏教であります。仏教は、今からおよそ一千四、五百年もむかしに、日本列島に伝えられました。爾来、日本人とともに、日本の歴史を歩み、日本の文化や日本人の生活に、多大の影響を与えてまいりました。日本仏教は、日本文化の基盤となりました。ですから、日本仏教を知ること、日本の文化や日本人のこころ

を知ることにつながるのであります。

日本仏教の特長の一つは、宗派仏教といわれます。いまから百年ほどまえの調査では、一三の宗と五六の派といわれるほど多くの宗派から成り立っていたのですが、百年後の今日では、およそ七万五千の寺院、約二万人の僧侶、信者数千万人、そして、この一三宗五六派から派生した仏教系新宗教が増加の一途を辿り、あまり多すぎて、正確な実数は把握されていないのではないかとおもわれます。

同じ一つであるべき仏教が、これでも仏教かと思まがうほどバラエティに富んでいます。このような事象に対して、いろいろ批判出来るとおもいますが、私は、人心の宗教的要求に三百六十度に向って対応しようとしている結果であるとうけとめています。また、既成仏教団の教化力が衰退したことを意味するのではないかともうけとめています。

さて、それぞれの宗派によって、帰依の対象としての仏・菩薩など、所依の経律論典、教団の構成要素もことなっています。

帰依する本尊に限っていいますと、薬師如来、大日如来、阿弥陀如来、釈迦如来、観世音菩薩、弥勒菩薩、地藏菩薩、不動明王、帝釈天、聖天など、さまざまな仏、菩薩などを崇拜し、信仰しています。この点、道、仏二教の礼拝像を併祀している台湾の仏教寺院と共通するところが多いと思われれます。

更につけ加えますと、各宗派には、それぞれその宗祖、派祖の祖師がいます。この祖師に対する信仰ははなはだ強いものがあります。

信仰の対象は、その宗派の本尊としての仏・菩薩、宗祖・派祖としての祖師との二段構えになっているのでありまして、これも宗派仏教の特長の一つでしょう。それで、先まわりして結論めいたことを申しますと、釈尊の存在はいよ



黒田武志老師(左)と東隆眞博士。国立台湾大学哲学系館会議室。

いようすくなつてしまつてゐるのであります。

そのなかで、釈尊を宗派の本尊とするのは、天台宗、日蓮宗と禅宗です。天台宗、日蓮宗は、所依の經典「法華經」の教えにもとづく久遠実成すなわち永遠の生命に生きる釈迦如来であります。

禅宗は、臨濟宗、黄檗宗、曹洞宗の三つの宗派がありますが、曹洞宗の場合、釈尊は、歴史上に存在し、坐禅によつて成道し、あらゆる人びとに真理を説いて、救いのみちを完成した釈尊です。これは、私が所属する曹洞宗を開いた道元禅師の釈尊観、本尊観と私はうけとめていきます。

私は、このような釈尊こそ、後世の哲学的、抽象的、観念的釈尊以前の生なまの釈尊原像であると考えます。釈尊を帰依する仏教徒の釈尊観であると考えます。

日本仏教史のうえで、釈尊に対する尊崇の念

が強い祖師は、十二、三世紀の鎌倉時代に限ってみても、明恵上人とか日蓮聖人は有名ですが、道元禪師もことのほか釈尊信仰の篤い祖師であります。道元禪師は、「十方の諸仏を見たてまつるべくんば、釈迦一仏を見たてまつるべし。かくのごとくならざる衆は、百万衆なりとも実に叢林にあらざるなり、仏道の衆にあらざるなり」(原漢文。『永平寺知事清規』)とまで強調して、釈尊一仏信仰をのべています。

各宗派が、それぞれ特色のある仏教を説くことは、衆生済度のために有意義な方法でありませんが、あい異なる本尊を立てて、絶対化するのあまり、仏教の開祖釈尊が軽視されてはならないでしょう。

また、ひとしく釈尊を礼拝するといっても、各宗派の釈尊観は、かなり食いちがいがあります。そのような食いちがいを、ある程度認めあい、そのなかで、おたがいに釈尊に対するある

種の共通の認識、理解を共有しなければならぬでしょう。

もし、右の点をないがしろにすると、日本仏教は釈尊の仏教ではなくなるでしょう。他国の仏教との国際的交流、理解のうえで、違和感と障害を招くことにつながっていくでしょう。釈尊一仏を奉ずる東南アジアの上座仏教との相互理解をすすめていく上で、このことは、重要である。私たちの課題であると考えます。

三

第二、法宝・教義について。

これについては、二つのことをとりあげてみたいとおもいます。

一つは、十九世紀・明治以降の仏教研究の意義と限界についてであります。

ご存知かとおもいますが、明治(明治元年は西暦一八六八年)以降の日本仏教における仏教

研究は日本の西欧化、近代化すなわち文明開化のなかですすめられていったのであります。

国内の大乗非仏説論やヨーロッパの仏教学などへの刺激をうけて、従来の漢訳仏典にもとづく宗派の教理学（宗乗とよんでいました）から脱皮しました。

サンスクリット、パーリ、チベットあるいは英、独、仏など各言語を駆使して、文献学的、歴史的、実証的、客観的ないわゆる近代仏教学、ヨーロッパ的仏教研究へ転換し、これを確立したのであります。

全国の国公立大学、私立大学に、インド哲学や仏教関係の講座を開設し、各宗派を設立母体とする仏教大学、仏教主義大学も誕生しました。各種の大蔵経、一切経をはじめとするぼう大な関係文献も、世界的視野と規模において蒐集し、編纂されました。

いまや日本の仏教学は、名実ともに、質量と

もに、世界の水準にあると考えます。そして、今後、日本の仏教学は、他の科学、学問とともに、ますます充実発展していくでしょうし、また、させていかなければなりません。これも、学術研究としては、きわめて重要なことです。

しかし、ここで、いささか懸念するのは、「仏教学盛んにして仏教亡ぶ」という事態を招いてはならないということです。

たとえば、日本の仏教学は、過去の仏教文献の整理ないし解説がその主流であつて、これも一つの学術研究としてはきわめて重要な意義をもつものではあります。その反面、仏教学者には、未来に向つて新しい価値を創造し、世界平和のために役立てていく前向きの姿勢が欠けているのではないかと反省させられます。

たとえば、また、近代的仏教学がすすめられていくなかで、各宗派の信仰の理論的根拠や実践体系となつている宗乗も、宗学と名称をあら

ためて近代的手法を尊入したのですけれども、同時に各宗派の信仰は不合理で主観的に過ぎ、取るに足らないものとしてしりぞけられる傾向を生み、宗学や信仰の衰退を招いてしまったようです。

その結果、各宗派の宗学者は自信を失い、その宗派に属する人びとは、思想、信念にその主体性を見出すことが困難となり、ひいては日本仏教が信仰の面で衰微してしまったのではないかと思われまます。

これに関連して深く感じさせられるのは、貴大学の葉阿月博士の仏教学者としての姿勢です。葉博士は、多年にわたって日本の駒沢大学、東京大学大学院で仏教学を専攻され、東京大学で文学博士の学位を取得された当代一流の仏教学者です。私がお会いたした博士は、在家信者としての戒を奉じ、名利から遠く離れることをこころざし、私財を投げ打って、学塾をつくり、仏



聴衆が続々と集まってきた。

教を広め、人材を育成したいという誓願を抱いておられるすがたでした。博士は、すぐれた仏教学者であると同時に、篤実な仏教信者であります。女性としての生涯を、仏教ひとすじにささげつくしてこられたお方とおみうけしました。

日本の仏教学者のなかには、学者としてのいうところの客観的公正な立場を強調するあまり、仏教の信仰を無視したり、仏教の信者を軽んずる傾向があったり、ひどいものになると、僧籍にありながら仏教とは無関係な立場であることをよそおったりする状況があります。このような事象にかねてより疑念をもっていた私は、葉博士の敬虔な態度にあらためて尊敬の意を表するものであります。

葉博士がおっしゃるには、台湾の仏教研究は、漢訳仏典の台湾仏教が研究対象の中心であるので、サンスクリット、パーリ、チベットの語学研究はなく、比較研究もなく、仏教大学もない

のですから、日本より五十年おくと申されます。

私は、台湾仏教の状況については、お恥しいことながらなにひとつ承知しない者ですが、私が訪れた仏教寺院の竜山寺でも、名前を失念しましたが、ある道教の廟でも、境内の一角に、仏教や道教を説いた印刷物が山のように積まれております。代金を支払う必要はなく、自由に持って行ってよいのです。寺や廟はきわめて開放的で、参詣人の出入りははなはだ自由のようです。螺溪石硯を購入するために立ち寄った文房具店の店先には、観音經の施本が置いてありました。もちろん無料の施本です。このように、台湾では、仏教の布教がたいそう活潑です。民間のすみずみまで浸透している様子をうかがわせます。私はこのことに深く考えさせられたのでした。

やや話題が飛躍するかも知れませんが、私の

所屬する曹洞宗には、駒沢女子大学をはじめ五つの大学がありますが、これらの大学に本格的な仏教や禪文化の国際的研究機関があると世界に向って公言できるかどうか。私たちは、この点、大いに、今後に向けて努力しなければなりません。

また、学術研究の国際的機関ばかりでなく、本格的な国外仏教布教のシステムや、財政予算の点で十分ではないのではないかというのが、日本仏教の伝統教団の一般的現状のようです。世界に教えを弘め、すべての人びとに安らぎを与えるのが仏教の使命ならば、単なるかけ声やきれいごとのセレモニーを行ってお茶をにごすという無責任なことではなく、真正面から国外開教の対策を講じなければなりません。

これらについては、ここでは論じつくされませんので、いずれ機会を改めて申しのべることとし、今は、仏教学研究と国外布教との国際的

組織の現状と課題を指摘するにとどめておきましょう。

いま一つは、禪門の宗義に関する現代的課題です。

現今の日本の禅宗は、鎌倉時代に中国からもたらされた臨済宗、曹洞宗、そして江戸時代に伝えられた黄檗宗、この三つの宗派があります、臨済宗、曹洞宗は、坐禅を修行することによって、現世において真実の自己を自覚し、覚悟することが原則となっています。黄檗宗は、この世で悟りを開き、来世の極楽浄土往生を願って南無阿弥陀仏の念仏をとなえる教えと聞いています。私が新店市の光明寺でいただいた『仏門必備課誦本』という日用經典集を拝見しますと、朝の勤行では大悲心陀羅尼などを誦誦し、暮れの勤行では阿弥陀経などを誦誦するようになっていきます。台湾の仏教は、禅と浄土教とがたくみに統一されているのでしよう。

臨濟宗、曹洞宗は現世の悟りが中心となっており、それは禪の特長をよくあらわしているといわれます。これに対して、黄檗宗は死後の救いを説いているので、浄土教的な要素が混入しており、純粹な禪宗ではないと見る人もいます。台湾の禪門と日本の黄檗宗との同異点について、私は大きな関心をもっています。

ひるがえって、人間は必ず死にます。そして死後の世界に関心がある限り、死後の問題を解決したいと願うのは当然であります。禪宗の出家僧侶は三界の大導師といえます。大導師たる者、死後の迷いがあつてはならないと私は考えます。しかし、日本民族固有の祖霊信仰にもとづいて、檀信徒の葬祭にたずさわっているかぎり、檀信徒の死後の救いについても、禪にふさわしい教化策が講じられなければならないでしょう。坐禅して現世で悟りを開きなさい、死後のことについては思ひわすらうなど説くばかり

では、十分な宗教的満足はえられないのではないのでしょうか。

日本の既成仏教の僧侶は、どの宗派であろうと、檀信徒の葬祭に熱心です。しかし、日本の多くの民衆は、死の苦悩を解決するために、僧侶の教えを乞うなどということは、ほとんど見あたりません。上智大学のカトリック神父アルフォン・デーケン教授の教える「死の準備教育」(デス・エデュケーション)は、海外にまで大きな反響をよんでいます。このことは、日本仏教の僧侶、禪宗の僧侶の及ばないところでありましょう。

また、社会的問題として浮上している臓器移植にかかわる死の定義など、仏教、禅僧の側の発言はほとんどない、発言があつたとしてもとりあげられないのは、僧侶が僧侶としての本分のつとめを怠っているため、社会的信頼を失っているからであると私は自戒の意をもってうけ



左より台大の葉阿月博士、許介麟博士(通訳役)、黒田武志老師、東隆眞博士。講演が終って質疑応答がはじまった。

とめています。

禅僧は、確固不動の宗教的信念を堅持すると同時に、社会的認識、歴史的感觉を駆使して、めまぐるしく流動する複雑多様な現代を教化していかなければなりません。学術研究に、基礎的研究と応用的研究とがあるとするれば、日本仏教の場合、仏教の応用的研究がはなはだしく欠けている、あるいは的確ではないということになるでしょう。

四

第三に、僧宝・教団について。

日本仏教における教団の現状と課題に関して、一、二の点を申しのべましょう。

日本仏教は、中国大陸、朝鮮半島を経由して日本列島に伝来した当初から、国家と密接なかわりをもつてまいりました。

また、民族固有の宗教としての神道、中国か

らもたらされた儒教、道教、ヨーロッパからのキリスト教などと交流をつづけながら存続してまいりました。多様な宗教、習俗、文化が混淆し、自然崇拜、祖霊信仰が中心となっています。十七世紀ごろ、江戸時代に檀家制度が出来て、現在に至っています。十九世紀の、明治時代に、男性僧侶の肉食、蓄髪、妻帯を国の法律で公認することとなりました。

その結果、日本のほとんどの仏教徒は、神仏をまぜあわせた多教混淆的信仰であり、個人単位の宗教というよりは家単位の宗教であり、僧侶なかんずく男性僧侶には戒律もなく、世俗化がどんどんすすんで、今や実質的には出家僧侶と在家信者との区別もなくなりました。僧侶は、宗教法人としても法的保護と特別の措置をうけている積極的な意味がいま問われています。寺院は、いまや住職の私有財産と化しているのではないかとの疑問の声もあがっている

ようです。

多くの僧侶は、上座仏教あるいは小乗仏教の戒律に比して大乘戒の優位を強調し、大乘戒を一箇の理念としての頭の中で知的に理解しているようです。実際には、破戒、無戒にひとしい日常生活をおくっているわけで、この点が、南方の上座仏教からきびしく批判されるところです。

教えていたきたいのですが、台湾の仏教寺院には、日本の仏教寺院のように、固定した戸数の檀家を擁し、檀信徒専用の墓地を設けているのでしょうか。台湾の仏教僧侶は、結婚しているのでしょうか。私の見るところ、どうも僧侶は結婚していませんが。

今更ながらおどろいたのは、ここ台北市に限りつつも、仏教徒専用の料理店（素菜）があちこちに点在していることです。この料理店は、魚や牛や豚などの肉を使わないいわゆる精進料

料理店です。もつとも台北市には仏教徒専用の料理店だけがあるわけではありません。牛肉を食べないヒンズー教徒のための料理店、豚肉を食べないイスラーム教徒のための料理店が存在しています。

日本でも、仏教の都といわれる京都、奈良、金沢などには、以前は、仏教徒のための精進料理店があつたことを先輩から伝え聞いたことがあります。今の日本では、ほとんど絶無に近いといつてもいいほどで、少くとも私は、一、二のお店しか知りません。もちろん、肉を使わない精進料理店はないわけではありません。それはもともとは精進という文字が示すとおり、仏教の戒思想にもとづいた仏教徒のための料理店であつたのでしようが、現在の多くの精進料理店は高額で高級な料理店に変容してしまい、けつして仏教徒のための料理店ではなくなつてしまつたようです。

ともあれ、台湾に素菜があるということは、台湾の仏教には、北方仏教、大乘仏教の戒が健在であることを示すものと言つてよいのではないでしようか。

ところで、僧宝・教団は、出家信者との共同体として成り立っているというのが、釈尊よりこのかた、北方仏教といわず南方仏教といわず、大乘仏教といわず、上座仏教といわず、その原則的あり方だとおもわれます。仏教は、仏、法、僧の三宝を要件として存在しているはずですから、僧宝の滅亡は、仏宝、法宝の亡滅につながつていきます。

日本仏教の場合、出家僧侶といわれる人びとの九九パーセントあまりが、結婚し家族をもつて在家化している今日、出家仏教の正統性だけを叫んでみても、その見とおしは暗い。さればと言つて、世俗化した出家僧侶の現状を肯定して在家宗学をとなえてみても、あまりにも在家

化した僧侶たちにとって、今さら積極的な意味はないでしょう。ただし、出家僧侶を否定すれば、僧宝は成り立たず、僧宝が成り立たなければ法宝、仏宝も成り立たず、三宝が成り立たなければ仏教教団は成り立たず、仏教は成り立ちません。在家だけの教団、あるいは出家だけの僧宝というものは原則として成り立ちません。

そこで、はなはだ矛盾した言い方になるかもしれませんが、在家化した僧侶の生活のなかに、どのように出家性を発揮し継承していくかということを模索していくのが、現代の日本仏教の伝統的既成教団の僧侶の課題、また寺院の課題だろうとおもいます。

それについて、私の脳裏にうかんでくることがあります。

韓国の曹溪宗の僧侶は、文字どおり、出家であつて家庭をもつていません。太古宗の僧侶は家庭をもつているそうです。僧侶が家庭をもつ

ているのは、日本植民地時代の日本僧侶の悪弊をうけつぐものだといううけとめ方があるようですが、それは今しばらくおいて、曹溪宗の僧侶は太古宗の僧侶を僧侶とは認めていない、軽蔑しているのではないかと私には思われたことでした。

さて、その太古宗の男僧は妻帯していますが、寺院で妻子と同居しているのではないそうです。妻子は、寺院の外部に住居を構えている。少くとも、妻は、寺院の外に在つて夫の仏教活動を支援しているというわけです。これは、家族と寺院に同居して、事実上在家同然の生活をいとなみ、寺院がいつの間にか私有財産化しつつある日本仏教の現状に対して、一つの示唆を与えてくれるのではないかとおもいます。

また、私は、台湾や韓国の仏教寺院をおとずれておどろいたことがあります。それは尼僧さんたちのめざましい教化活動です。

韓国のS尼は、ソウル特別市に寺院を創建して多勢の身寄りのない子どもたちの面倒をみています。濟州島とアメリカのハワイ州に寺院を開創したと聞きました。一見して、おだやかなおとなしい、無口のS尼さんですが、実は超人的な教化力というか神通力を發揮しているのです。

台湾の北部のある市のK寺のR尼さんは、お師匠さんと協力して、寺院を建立したのですが、それだけでは満足せず、さらに進んで日本に留学してR大学で仏教学を修学しています。おどろくべき求道心です。

またT宗のGさんは、大学をつくりました。その広大なキャンパス、近代的な施設、設備、国際的な感覚を見聞して、ただただ圧倒されるおもいででした。まさに現代の奇蹟といつてよいでしょう。

また、お聞きしたところによると、台南のK



国立台湾大学陳維昭総長と会談。左より黒田、東、陳総長、許博士。於総長室。

寺ではK尼さんが病院を設立、経営しているということでした。

このような例を、私は日本仏教界で知らないのであります。

近年、台湾では、尼僧さんが増加の一途をたどっているとのこと。しかし、日本では、尼僧さんは、逐年減少していく傾向のようです。韓国をふくめて台湾の尼僧さんたちの目ざましい教化活動、社会事業、教育事業、医療事業など各方面の活躍ぶりには、私は心底から敬服するものであります。

最後に、日本仏教の僧侶の一部の人びとは、仏教の思想、信仰にもとづき、大乘菩薩道の誓願の精神を発揮して、社会的、国際的実践をすすめています。

現時点での日本仏教は、その学術研究において世界の水準を維持しているかも知れませんが、その反面、仏教の教えをどのように現代に生か

していくかという点で、ほとんど無力に近いようです。また、禅宗は、社会にかけ離れたところで瞑想を重んじ、自分の悟りや救いを求めていると批判されることがあります。この非難には、私たちは、謙虚に耳を傾け、反省しなければなりません。

禅宗は、臨済宗、黄蘗宗、曹洞宗の三宗がその代表としてあげられるわけですが、私の所属する曹洞宗では、カンボジア難民の支援にあたる曹洞宗国際ボランティア会、東南アジア難民の支援や教育里親運動などを実施している藤本幸邦師、そして黒田武志師の横浜善光寺留学僧育英会などがあります。

黒田武志師は、私と大学、大学院が同期、同窓の間柄でありまして、そのようなご縁から、およそ四〇年の交流があり、育英会の理事として、一〇年まえの創立当初から、理事の一人として、いささかのお手伝いをさせていただいて

おります。

この十年間に、アメリカ、タイ、インド、スリランカ、フランス、イギリス、オランダ、韓国、中国、台湾、カンボジア、ドイツ、バンダラディッシュなど一六か国五六人の育英生が輩出しました。黒田武志師は「宗祖を通じて釈尊に帰る」という信念をいだいて、仏教の振興、世界の平和、人類の進運に貢献したいと決意し、世界的な視野をもつ人材の育成にとめていきます。宗派のちがいを超え、大乘、上座の枠を超えた大事業です。貴大学の葉阿月博士も育英会の顧問としてご協力下さっており、台湾からも育英生がでています。

葉博士は「中・日仏教三宝の差異について（国立台湾大学日本総合研究中心編著『中日文化差異研討會論文集』中華民國八十一年、国立台湾大学日本総合研究中心刊）と題する論文において、横浜善光寺留学僧育英会は、「国外へ留学に

出かける日本僧侶に奨学金を出さずだけでなく、更に外国（米、韓、泰、印等）から日本へ留学に来た僧侶にも奨学金を与えている」と紹介して、一定の評価を与えて下さっています。

私どもは、育英会の活動を一つの窓口として、今後とも、台湾の仏教徒、異教徒を問わず、多くの人びとと交流を重ね、おたがいの理解と協力をして親善と繁栄がますます盛んになっていくことを願っています。

五

以上、思いつくまま、お話をしてまいりました。演題に忠実にお話することが出来たかどうか、皆さまにご理解いただけたかどうか、懸念しています。まだいろいろ申しのべてみたいことがたくさんありました。

しかし、時間の制約もありますので、他の機会にゆずりまして、とりあえず、これでおわり

たいとおもいます。

ご清聴ありがとうございます。

へ付 記

1、講演が終了して、聴衆の学生たちと質疑応答がなされたが、そこでいちばんとりあげられたのは、日本仏教の僧侶の生活の実態、意識に関してであった。それらを通じて、私は、台湾の若い人たちが日本や日本仏教に強い関心を抱いていることを知らされたのであった。

2、黒田武志老師と私は、かつてわが日本の曹洞宗の両大本山別院であった旧址をおとすれた。旧址は台北市の中心街、目抜き通りにあった。隣接する東和禅寺では一山あげての熱烈な歓迎をうけた。想起すれば、私が国民学校（小学校）四年生の夏、大東亜戦争（第二次世界大戦、太平洋戦争）は終結した。戦後の学校教育で、私たちは、日本はアジアの諸国を侵略し、植民地として支配し、非道の限りを尽くしたと教えられて来た。

後年になって、あらためて、私は、日本仏教とく

に禅宗の海外布教、台湾布教も、日本の植民地政策に沿って行われたところがあり、ご迷惑をおかけしたことを知らされた。このたび訪台して、台湾の人の過分のご親切がことのほか身に沁みだ。私は、日本仏教が台湾で行ってきた過去のあやまちの点を十分に認識し、これからの台湾とのうるわしい交流のあり方を模索していきたいと念じている。

3、この講演要旨は、帰国後、録音テープを整理したものであるから、その主旨において基本的に変化はもちろん無いが、論旨をより一層明確にする意図のもとに成文化した。したがって、速記録的記録ではないことをお断りしておく。

（東 隆眞）